

事情  
村井静馬編輯  
明治太平記  
十三編  
上

14  
2504  
25



特 14  
2504  
26-25

村井静馬編輯  
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記

全

東京書林

延壽堂發兌

維新の辰来りてよう 縉紳の高きい更るる 奮るる 賤の漢もて  
誰り皇運の挽回せしと 鼓腹して 歡をぎらん 然してつまむ 十稔ふ  
満ぬふ 佐賀ふ 江藤等が 暴動りり 尋で 臺湾韓地の 事件ふ 兵  
を 動りも 支屨あり 一も 皇威の 確乎たる 所と 群臣の 奮忠 尽  
力ふ よろこぶ 乍ち 鎮定ふ 及び びつ 治まる 御代の 時津 風枝と 鳴  
まも ちつと 憶ふ 又 西南ふ 雲起り 逆波 動揺ま するの  
報あり 編次たる 冊子ふ 一りつと 這も 漏ま べき 支あり 後  
更ふ まる 筆を 採て 开が 鎮静の 形状と 録し

明治十年三月吉旦

村井静馬記

明治太平記三編一



高嶋中佐

安岡縣令

太田黒惟信



與倉中佐

種田少將

上野堅吾



加陽齊堅

前原一誠



太田黒伴雄

# 卷之弍

朝鮮の修信使帰國して後 聖上奥羽  
御巡幸の夏より始まる熊本の不平士族等  
頻り頑固の説を唱え終り容易ありざる  
の時機に至るとするに終る

# 卷之貳

安岡縣令が神風連の暴挙を以て  
を粗察して参事大属等と密話  
及ぶ始まる鎮臺の本営坂谷少尉  
苦戦して焼死するに終る

明治太平記十三編卷之一

東京

村井静馬著

再説朝鮮の修信使へ既去る日参朝して天顔と

拜一奉り一後も官負及び華族方の邸に招き

杯一々大に款待し預りたる少を正使金綺秀と始

と一々歡ぶと限り多く逗留する事数日にして終

帰國ふ及び一々是を喋々言ひて觸らせ一征

韓論の紛紜も爰ふ至るに稍止となり是より



明治太平記十三編一

四

主上ハ豫ク仰出されたる奥羽御巡幸遊ばされんと  
六月二日小東京と發しらとと御輦を東へ向あみ  
みぞ古今例もあらざる事少く僻遠の地の田舎人等ハ  
是迄生る御神ウと思ひ込つ居たりし親親しく  
拜と奉る事や老たるを助け幼きを引てあめく  
道路ふ出る状ハ赤子の親ふ遇へるが如く皆万歳と  
唱えたる斯る愛度御政道の四隅ふかろがを折柄  
あれば奈何ある頑固の輩ありとも仮ふも不平と鳴き

理ちろトと思ひし其年の十月ふ至り乍ち肥後の  
熊本小容易あらざる事起まる原由を尋める小是  
又一朝一夕の事としも憶へまば抑熊本の旧藩士  
ふと元高千石を領したる住江甚兵衛と喚るハ  
年来攘夷の説を固守し維新の後ふ至り尚其心残  
変る事なく同縣下ハ言ふも更あり近縣まへも鼓舞  
し同憂の士と黨與を結べるその沙汰最も頻り  
あるを熊本の旧知事公々のうふ聞きて深く患ひ

急ぎ方向を改むるやう懇々諭しめども解悟の  
 色も見えぬ余も事と発するの名義ありざる  
 故に依り猥り兵を動しがごとく只苦慮のこゝて  
 居たるゆゑ既小慶應年中小長州の大樂源太郎が  
 暴挙の時も其後明治六年小佐賀まで江藤新平等  
 の暴動に及び刺し俱に支と発せんとせしが未だ  
 其凶小至らざる間小渠等が敗れを取りし故志と  
 達せると得を又近年小至りたる竊る小長州の前原

一誠と密意を通し又筑前の旧秋月藩の士族をも  
 種々小説示して同盟せし者數百名その他諸縣を  
 煽動しと時と待とも機會を得を然るふ其頃廢刀の  
 事引續きて禄券の御布告の出るふ及び恠てへ士  
 たるの甲斐なると弥不平の色と露へ断然事と  
 起さんとせしが兎角名義の立ざる致思ひ猶姑く時  
 節致待んと悲憤と忍びと扣へし所へかの前原  
 より檄文来りし其書面の大意と言ひ兼て相

企てたる義挙の来る十五日とりて蜂起するまへに必  
 其機と誤る勿と認めたりて同盟の士數十名  
 住江の宅に至り是を屢時機と失ふひ虚しく  
 今日に至りし今前原の檄文を得て須臾も  
 擬議あまなきふりて速く事と発せん御賢慮  
 奈何候やと頻りみ迫りて問からば其時住江甚兵衛  
 へ打案おる事稍姑くして乍ち首と左右み打掉り前  
 原何等の見込とありて事と拳んと計るに知らねど

軍の名義と専らとまらぬ名ある兵と動り難  
 と確乎として更ぬ又動おる気色も見えざれば衆  
 る望む失へども巨魁たる住江が斯の如く小言  
 へる張りて遠がみ争ふ事と得を據なく前原へ  
 日延の返答と做し置し幾程もなく住江の不図  
 病ふありきと一み終ぬ薬餌の驗もなく思ふ事と  
 果さば一て黄泉の鬼とありて同志の面々力を  
 落し備此上も奈何みせんとよりて會議み及び



名義の二  
 字と固守  
 激徒等と  
 論



月台六平巳三編



月台六平巳三編

七

たりしふ豫て熊本の旧士族等の中ふ学校派実  
 学派敬神派神風連民権連など言ふ党派あり各  
 一派の見識と立たる中ふ敬神派へ殊ふ頑固の  
 輩多く開化の何たる事と知らざり尚封建の旧習を  
 慕ひ頻りふ不平の説を唱ふるこの黨の巨魁と  
 言ふる上野堅吾加陽霽堅太田黒伴雄の三名  
 あり就中上野堅吾の歳も五十の坂と超え高  
 四百石と領せし者ゆゑを主意も有るべきふ尚旧弊を

脱走と得む又加陽霽堅と喚ぶ元細川家の  
 一小卒ふしと僅く五人扶持の俸禄と得る最も名  
 もなかり者ありし勤王の志気洩くざりしより  
 去る文久二年の夏二名の弟四郎時雄等と引連る  
 本國と脱走し真木和泉平野国臣等甲乙と同盟  
 の約を結び種々尽力を倣せしゆゑ維新の後  
 朝廷より多年の勲勞と賞せしむる卒らてありしと  
 引揚て士族の列に加へらるる後まは清正公と祀まる

錦山の神社の詞掌ししやうふ補ほせしは尚勤王の志操ししやう  
 と忘わすまざる者ものとて言いへるふ方今さうごんの形勢かたせいと悪あき  
 ふ思おもひ僻ひめさよの巨魁きょがいありたるありん又また  
 太田黒伴雄おのだくろばんゆうと言いへるは伊勢神宮いせじんぐうの祠官しじんと做なせし  
 大野某おののあきらの子こありし張先年せんねん當藩とうはんの士し太田黒某おのだくろあきらが  
 養子やうしとあり前名ぜんめいと鉄兵衛てつべゑと稱いへし後伴雄ごばんゆうとい  
 改あらめたりとぞ余われは是等これらの面々めんめんが豫よて主張しゆちやうする所ところ  
 の論ろんは既すでふ前まへふも言いふ如ごとき守も奮きう頑固がんこの説せつありと

嚮むかふ廢刀ふたうの令しんと布ちれ後のちも禄券ろくけんの布告ふこくと聞きく  
 斯かくとい四民しにんの冠かんたる所ところの士族しぞくの名義めいぎも是迄こゝまでありと  
 阿容あひら々々ざざとて一ひとつらふまきありばと頰あはりふ激論げきろんと發はち  
 せしも彼住江かのまゝのえが名義めいぎの二字ふたごふ押おへらるるを破やぶり  
 兼ある何なにも黙もくし居かたりしが主謀しゆぼうと頼たのみし甚おし  
 兵衛べゑの世よよ亡人あなひととありし後のちも暗夜あんやふ失うふ燈火とうひ  
 の如ごとくかのく英氣えいきも折おけんとせしと彼上野某かのうえのらの  
 三名さんめいが頰あはりふ衆しゆを激げきして斯かくまを思おもひ迫せまりし其そのを

今住江いままゐのえが何なにとて画餅あべにならざるべき謂いふ一此上この上の  
 長州ちやうしゅうより前原まへはら一誠まことと事ことと計はかりり俱ともふ大義たいぎと企たくつべし  
 とて頓とつて長州ちやうしゅうへ使者しやと遣つはし我輩われら既すでに意いと決き  
 して同時どうじふ事ことと起おこまべられ速すみく兵へいを挙あげの  
 日ひと期きして賜たまはるべき旨たま竊ひそく申まを送りしを前原まへはらへ  
 奈何いかんある故ゆゑふ使者しや小對面せうたいめんも做なぐれば斯かくくも使し  
 節せう小立せうたてたる甲斐かうひなく困却こんせつせざる趣おもきと演のべ適あたは  
 一面會いつめんかいと許ゆるして成否せいひへ免とゆるは御返答ごへんたうと兼かねるふ

何なにとぞりせむ立歸たちかへりて同盟どうめいの士し小稟せうりやうし聞きべき辨べん  
 も何なにとぞ絲いとば此意このいと推おしあひ杯はい懇情こんじやうと尽つく  
 て請求せうきうめしうは澁々しぶしぶと一誠いつせまの使者しやを一室いつしつふ  
 喚入わんいとなれど最不與氣さいふみやうがある面容おのちも豫よての盟めい  
 約やくあるふより過日かじつ小生せうせい大事だいじと計はかりり日ひと期きして申まを  
 入いし御返答ごへんたうの趣おもきも甚た以もつて失望しつぱうせり然さる  
 女々めづめしき御所存ごしょぞんありて俱ともふ大義たいぎの議ぎらと冷ひやとて  
 彼の孔明こうめいが仲達ちゆうたうふ贈りし巾幗きんせきの意いも做なる婦人ふじんの



女<sup>おんな</sup>服<sup>ふく</sup>と<sup>と</sup>與<sup>あ</sup>  
 て<sup>て</sup>前<sup>まへ</sup>原<sup>はら</sup>熊<sup>くま</sup>  
 本<sup>ほん</sup>の<sup>の</sup>使<sup>し</sup>節<sup>せつ</sup>  
 と<sup>と</sup>辱<sup>は</sup>し<sup>し</sup>む

小袖一領と與へて其座を立一ぐ件の使者の大  
 の小慚その俣小立歸り緯恁々と報告るみぞ  
 神風連の輩へ忽地怒り心頭小発して一誠何等の  
 者なれば俺們と婦人小擬へて斯く蔑み視るるん  
 餘事へ差閣き長州小至り前原と一議論して尚も  
 不禮の言と吐く一誠奴が首と捻切り兵と起すの  
 血祭りふせんと齒と切りさ憤ると遠が老練の  
 上野堅吾が頬り小憚る壯年徒と押鎮めつ小膝と

找め衆客姑く怒りと憇て我が言ふ所を先聞  
 登一前原素より凡智ふわらむ殊更大事と計らん  
 とある志気ある者あると同志の者と輕蔑して乍ら  
 人望と失ふ如き厩忽の拳動をぶきふわらむを我小  
 婦人の小袖と贈るも思慮ある事と憶へるれど今  
 豫め辨トがさ一仍て断然事と決一當所小於て  
 義旗と揚るる豫と盟約と結びたる秋月日藩士  
 その他九州四國小於之もあはれ小應ずる者あるべ



言ふも更あり四國中國も響きふ應ト我が一味と  
 あるふ至り介して東ふ癸向せば官吏が酔と醒せるのこ  
 う堂々たる神國の皇威と海外ふ示さふ至らん仍て来る  
 廿六日と期一義旗と挙るの日と定めん其餘の事ハ  
 恁々と衆論爰ふ決定せしむ夫等の旨歿同志の  
 者へ密々通知ふ及び専ら起兵の準備をせしめ  
 恁て廿四日ふ至り此夜も例の激徒等ハ藤前の神社  
 小會合して尚も手筈と談ト居たるふ此時縣の官



吏等ハ近頃縣下の士族等の屢藤前八幡の神社ふ  
 何更やらん集會するをさへ心得なく思はるふ外ふ不  
 審の廉も有る故心利さ





巡查三名と

竊る其場へ

遣へりて渠等が拳動と窺ひありて

神風連の激徒等のうち疾くもそと見認りゆ

備へ密事の縣吏ふ泄して弁を探るべき為ふとく  
 常不巡查の廻らざる當社へ渠等が来りしる  
 べー一個も餘さば討取まと言ふより速く血氣の  
 壯士十人を馳出押捕圍つて斫て蒐まば巡查も這  
 所ぞと棒取伸く須臾へ防ぎ戦ひしうど勢ふ無  
 勢あるのまゝ真劍とめて斫立らして争が敵  
 まる夏と得べき數ヶ所の痍傷よりめく所と  
 暴徒等散くみ斫さるる死骸と傍ふ搔遣り

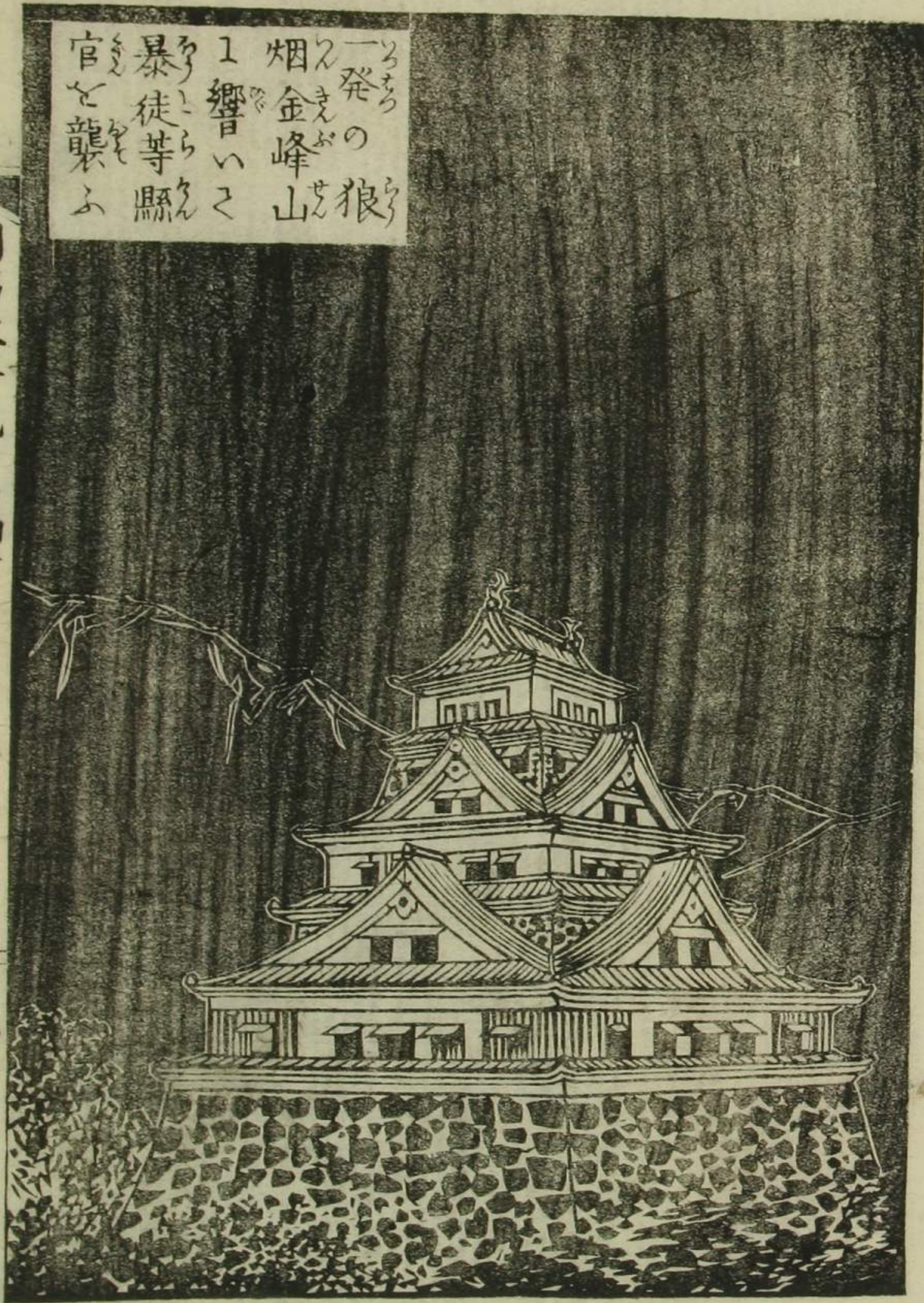
棄て緯の次第と斯と報告と各駭き且呆とて  
 互ひみ目と目と見合まの又言ふより毛ゆらざりしが  
 升が中ふ上野堅吾の座中と吃度見廻して各位何と  
 う思ひ我輩機密と他ふ泄さどと厚く心を用ひし  
 縣吏等疾くも嗅知り巡査と以て探らんとする勢ひ  
 斯の如くんば須臾も猶豫の俶し難し前んぞる時  
 へ人と制し後る時へ制せらるるの古語さへゆら紙  
 阿容々々といふ渠より討手と向らさんより豫ての

手筈の差ふとも今宵と過ぎる事と起して不意と撃ん  
 へ奈何ぞやと言ふと打聞か加陽太田黒も定ふ  
 然りと同むれば自餘の面々誰ゆつと違背不及ぶ  
 者のゆらぎ此年月の鬱憤と晴まへ今此時ふゆり  
 と雀躍しつ勇立ぬを介らるる諸方へ討入りの手配  
 と倣んと言ふふ豫ての縣廳と攻取て是と根據と定め  
 事と計らんと議しなれど夜陰の事ゆゑ縣令始め  
 何れも居宅ふ退きて廳の僅ふ宿直の者のと数

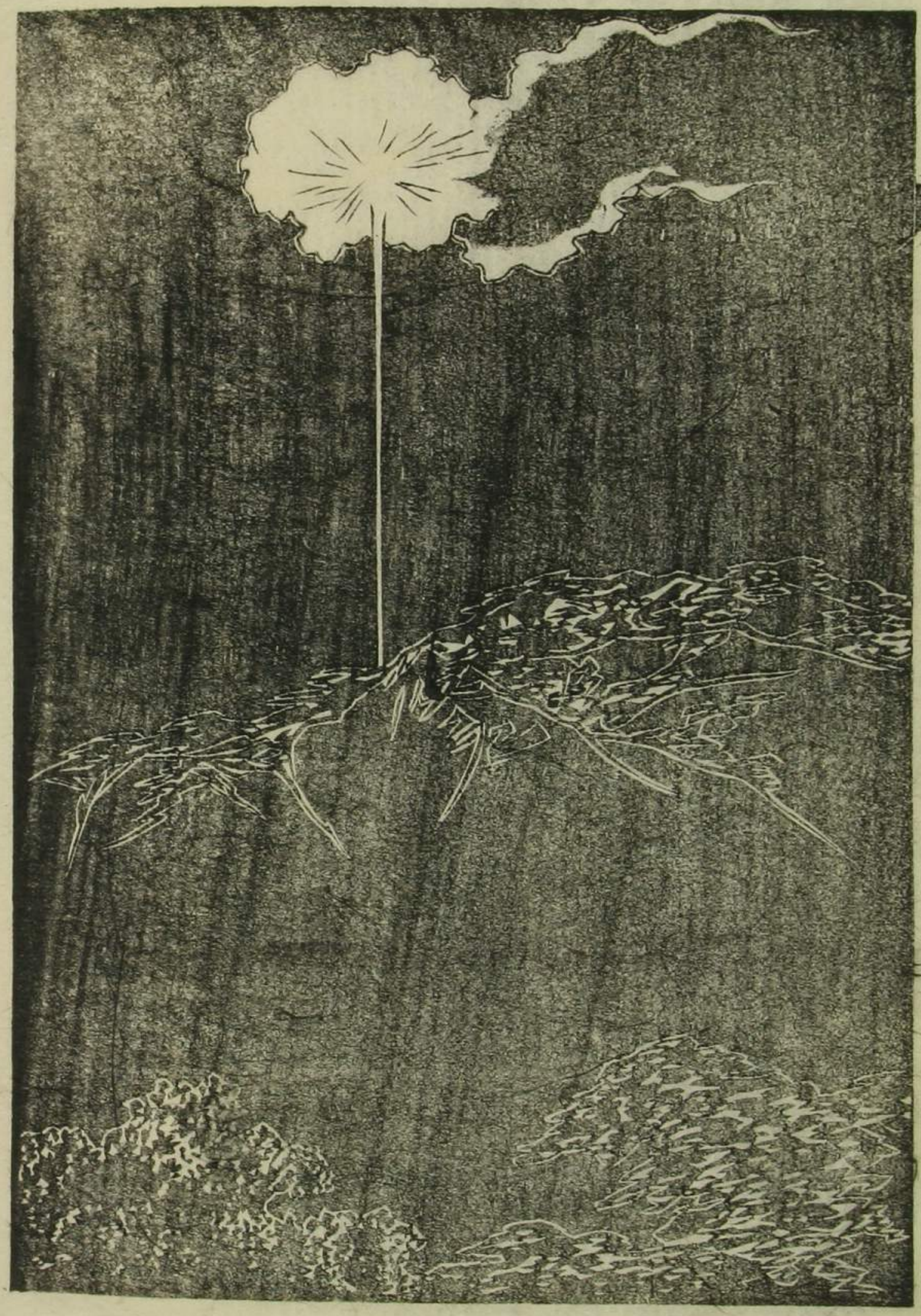
輩このふ過すぎざるねがひふ寐惚眼まよひでらんあ討平うちざるふ難たくも  
わらんあ思おもふあ長官ちやう等らとう撃うち洩りさんも遺い憾えんを  
ととべと渠みち等ら居ま宅やとち鎮ちん臺だいとあ襲おそひま先ま重か立たるら官くわん吏し等らと  
殺ころ戮りをしたるそ其その上うふて諸しよ手てのせきといつふ併あせち廳ちやう張  
撃うちともお遅おうらとぐん議ぎ一い定ていふあ及あびあくあ則すなちあ安岡  
縣けん令れいのか山やま崎ざきのり旅りよ館かんへの吉きち村むら一い猿さる渡わた常じやう雄ゆう等ら五ご人にんあて  
斬き入いるまべきくあ又また司し令れい長ちやう官くわんたるた種たね田で少せう將しやうのが川がわ向むかふしん新しん屋や  
敷しきのり旅りよ館かんへの赤あか嶺ね一い雄ゆうをし始はめとして十じゆ名めいあて對たいふべく

同どう所じよ高たか島しま中ちゆう佐さのぐら寓ぐら居まへの千ち場ぢやう真ま靱と等ら六ろく人にんとし與よ倉くら  
中ちゆう佐さのきやう京きやう町まちのり旅りよ宿しゆくへの齋さい藤とう熊くま四し郎らう等ら三さん人にんとき定ていめり旧  
のし四し等とう判はん事じうて第だい三さん大だい區く六ろく小せう區くある大おほ田た黒くろ惟い信しんのぢやう郎らうへの  
内うち田で三さん郎らう等ら五ご人にんあて討うち入いるまべきくあ又また鎮ちん臺だいへの加か々々見み十じゆ郎らう  
春はる木き歷れき太た等らとし始はめとして襲おそ撃げきまる者もの五ご十じゆ余よ名めいと  
各おの持ぢ場ぢやうをわ分ぶん配はい做し一い儲たくわ上じやう野の等らのさん三さん巨きよ魁けいその他た頭かぶ立た  
たるめ面めん々々への宗しゆ徒とのし士し族ぞくをひ引ひ俱ぐして遊あそ軍ぐんとか號ごうして  
諸しよ手てのし躬こう方ほうをあ應おう援えんまるして指し揮きともあ為なるべきふ評ひやう議ぎ

一つらのら狼ろう  
 煙えん金きん峰ほう山さん  
 響ひびのこ響ひび  
 暴たけな徒ら等ら縣けん  
 官くわんとと襲おそふ



月名大正巳三編一



月名大正巳三編一

十

決して手配りも稍整ひ一が然りとて區々小斬入る  
 時ハ討洩を度のりる人も測らるれば金峯山は狼烟を  
 揚る紙以て暗號と定め諸方一時小込入て豫に準備  
 の火菜と火と付け猛火は怖まら狼狽を討バ  
 輒く本意と得べ一とその計策と説示一何まも軍  
 装と身と固り身の護り小製へ置一三種の神器小  
 摸擬る一たる一面の小鏡と各襟小掛るもりり或る  
 懐中あまもりりて席小列せ一形状ハ小具足つきたる

其上小烏帽子直垂と着せ一りまは切たれども家  
 重代と誇りく着るせ一緋緘の土器色よりりも  
 りれど常世が昔と忍べるみや錆薙刀の根多刃  
 合せ疲たる馬小鞍置て卒と言は駈出さんと片唾  
 と吞たる窮士族等が思ひくの打扮ハ異形あれども  
 必死の体ハ道小一騎當千の勇士と見えふるとあ

明治太平記十三編卷之一終

